学園無双～天下無双はこの俺だ～

熊之信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園無双～天下無双はこの俺だ～

【Ｎコード】

Ｎ６３５７Ｅ

【作者名】

熊之信

【あらすじ】

主人公「藤澤京介（♂）」は、部活の帰り道で張飛と名乗る少女に出会う。その少女は他でも無い、三国志の英雄張飛だった。彼女とのひょんな出会いがきっかけとなり、様々な変人達と関わる羽目になってしまった京介。とにかく口の悪い呂布、プレイボーイ張遼、フハハハハ司馬懿、高飛車お嬢様の袁紹や武士道まっしぐらの趙雲、等。様々な変人が彼の学園生活を破壊する。そんな日々を綴ったドタバタコメディー。

プロローグ1：虎牢関の戦い（前書き）

この物語は三国志演義を基に作成しています。もはや三国志はあまり関係無いですが、一応……。ちなみに、すこーしラブコメ風味ですが、コメディー寄りの内容です。

プロローグ1：虎牢関の戦い

西暦百九十年。

袁紹（えんしょう）を盟主とする反董卓連合軍は、洛陽より五十里。天険の要塞、虎牢関で董卓軍と対峙した。

十万の兵を置けば、天下の諸侯は通路を失うと言われる虎牢関。

董卓軍はそこを十万どころか、一・五倍の、十五万の兵で守備をしているのだ。

そしてそこには、かの有名な呂布奉先（りょふほうせん）がいる。

この状況には、連合軍も頭を悩まさずにはいられなかった。

「呂布か……」

「はい。人中の呂布とも言われる豪傑です。華雄（かゆう）の時みたいに関羽（かんう）が討ち取ってくれる。とも思えません」

「そうよね……」

連合軍の総本部であり、作戦会議を行う陣の中。連合軍参謀、曹操（そう）は悩んでいた。

いかに虎牢関を攻略するか。もそうなのだが、それよりもまず呂布をどうするか。と、ただただその事を考えている。

「オーッホホホ！　そんなに悩まずとも、たかが呂布など我が軍が蹴散らしてご覧にいれますわ！」

「「さすがお嬢様です！！！」」

「袁紹（えんしょう）、顔良（がんりょう）、文醜（ぶんしゅう）。あんたらさっきからうっさいのよ。少し黙っててくれる？」

「曹操！！！　この名族たる袁本初に向かってその口の聞き方はなんですの！！！」

袁紹は作戦会議の時もそれしか言わず、結局会議は中断。その為、曹操がこうやって一人で考えさせられる羽目になった。

曹操はその事で……、だけでは無いが、袁紹に対して大分苛立っていた。

「うるさい人間にうるさいと言って何が悪いのよ！　そもそもあんたのせいで――」

「――曹操様っ！　……今は呂布をどうするかを考えるべきかと」

先程まで曹操と話し合っていた人物が曹操を諌める。

「……そうね、ごめん。ありがとう、劉備（りゅうび）」

そうだ。今はこんな能無し盟主に構っている暇なんて無い。

曹操は冷静さを取り戻し、劉備という男に向かって礼を言った。

「いえ。そういえば公孫讃（こうそんさん）殿は……？」

劉備はふと問い掛けた。

「公孫讃殿なら、浪人が尋ねてきたとか何とかで……」

「浪人？」

「ええ。趙雲（ちょううん）とかいう名前の」

「趙雲……。ですか……」

趙雲。

劉備はその名前になにか引っ掛かりを覚えつつも、さて。と話を続ける。

「呂布に正面から当たっては負けるとは言いませんが、勝てるとも言えません。ましてや我が軍は袁……団結に欠けます。ここは、策を講じて倒すのが、よいかと」

「袁紹のせいで団結に欠けるのね」

曹操は肩を竦めながら、先程から横でファッションショーをする三人を見る。

そしてフッ。と鼻で笑った。

「策……ね。なら、郭嘉（かくか）でも呼ぶのがいいかしら？」

「ええ。郭嘉殿ならば、良き策を思い付ー！」

ジャーン。ジャーン。ジャーン。ジャーン。

鳴り響く銅鑼の音。

「呂布が攻めてきたかっ！　誰か！　鎧をもて！」

「では私も自陣に戻ります。話はまた後ほど」

何回聞いても好きになれない銅鑼の音。

劉備は戦争を無くす為に戦争をする自分に嫌悪しつつ、渋々自分の陣営に戻っていく。

袁紹も銅鑼の音を聞くや否や、素早く鎧の用意をさせる。

普段は我が儘お嬢様の袁紹も、いざ戦争になるとその指揮官としての能力をいかんなく発揮する彼女。

その為、曹操も袁紹に対して中々文句を言えずにいるのだ。

「顔良、敵の数は？」

「およそ五千です、袁紹様」

「五千……。おおよそ我が軍の実力を確かめにきた。という所でしょうか」

「ええ、おそらくは。では袁紹、私も自陣に戻り戦の準備を致します」

「分かりました。また何かあったらここにいらして下さいね」

曹操は、袁紹がいつもこの調子なら。と思いつつ、自陣へと戻っていく。

その目はギッと研ぎ澄まされていて、それは言わば戦人の目だった。

――公孫讃陣営――

それは劉備が陣に入るのと同時だった。

「兄上！　呂布が攻めてきました！」

「うわっ！　ああ……、関羽か。その事なら既に知っている」

「いよっしゃー！　いよいよあの呂布と戦えるのかー！」

「おい張飛、遊びじゃないんだぞ」

毎度ながら、張飛のこの戦好きの性格はどうにかならないのか。こんな若くて美しい女が戦、戦と言っているのは、時代がそうさせているのだろうか。

だとすれば、なんとしてもこの群雄割拠の時代を終わらせなければ。

劉備はそう思うのであった。

そこで劉備は陣の中に公孫讃の姿を見つける。クスクスと笑いながら張飛とのやり取りを見ている彼、公孫讃。

一兵卒に過ぎない劉備、関羽、張飛の世話をしてくれたのは他でも無い、彼だった。

と、劉備はある事に気付く。

「ん、公孫讃殿。そちらの方は……？」

劉備は公孫讃の隣に居る、長い槍を持つ少女を見ながら尋ねた。

しかし劉備は、公孫讃に尋ねると同時に先程曹操が言っていた事を思い出す。

そういえば確か、公孫讃殿の下に浪人が訪ねてきていたとか……。確か……名前は……。

「もしやその方が趙雲……？」

「その通り。彼女の名前は趙雲子龍というんだ」

そう言って公孫讃は趙雲の肩をポンッと叩いた。

「趙雲子龍（ちょううんしりゅう）だ」

愛想が無いなぁ。

劉備は心の中で叫ぶ。

「はじめまして。私は劉備、字（あざな）は玄徳」

「ああ、知っている」

知っている？　私の事を？

どこで知ったんだろう……。

「兄者ー。今はそんな事より呂布を何とかしようよー」
「張飛の言う通りです、兄上。早く戦の支度を」
「あ、あぁ。分かった」
しかしその疑問は、張飛と関羽の催促で吹き飛んでしまった。
劉備は関羽から剣を受け取り、それを腰に付けた。
「よし、相手は呂布だ。とにかく死なないように頑張ってくれ」
「はい」
「分かりました」
「まかしといてー！」
公孫讃の言葉に劉備、関羽、張飛が順に返事をする。
「では関羽、張飛。いくぞ！」
「はいっ！　兄上！」
「おっけー！」
そして劉備、関羽、張飛の三人は戦場へと赴いていった。

プロローグ2：河川敷の戦い

「キャー！　楓先輩ー！　ナイスシュート楓先輩ー！　キャー！！！　カッコイイー！！！！」

分かってねぇよ。分かってねぇよ。分かってねぇよ。

「……とかキャーキャー言いやがって。あの女共、ぜってぇ分かってねぇよおおおおーー！！！！」

「まぁまぁ、落ち着きなよ京介（きょうすけ）」

「これが落ち着かずにいられるかぁぁぁぁぁぁー！！！　ヌォォォォー！！！　……はぁっ、はぁっ……」

「お願いだから僕の身にもなって？　僕、完全に変質者の友達として周りに見られるんだよ？」

部活の帰り道。俺はサッカー部の友人、松沢友樹（まつざわともき）と一緒に河川敷を歩いていた。

桜の花びらが咲き誇る4月。茜色の太陽が川にゆらゆらと姿を映し、河川敷ではお花見という名の宴会を終え、その片付けをする人達をちらほらと見かける。

短いようで長かった春休みもいよいよ佳境に入り、三日後から俺達は進学年一一高校二年生として新しい一年を迎える。

今年は高校入りたてで右も左も分からない状況だったが、さすがに一年経つともう慣れて、とりあえず影でなら先輩の悪口を言える程度になった。

その悪口の内容は今日の試合について。

怒りの対象は楓先輩と、先輩に黄色い声援をおくる女子だ。

「点を取るのがフォワードの仕事なんだから、いいんじゃないのかな？」

「……それはそうなんだけどさ。点を取るまでの過程ってのも大事だろ。だってあの人、持ったらドリブルしかしないじゃん」

「うん、確かにそれは問題だよね」

「ああやってドリブルばっかりする人が目立ってさ、俺や友樹みたいにパスばかりする人は目立たないって……。あぁぁぁぁぁ……」

分かってねぇ。分かってねぇよ。フォワードイコールチームで一番上手い人。とでも思ってるのか？

分かってねぇ。分かってねぇよ……。

「いいじゃん、京介が上手いって事は、チームの皆が認めてるんだから。それで十分だと思うよ」

「まぁ……。一応努力はしてきたからな……」

思えばここまでの俺の人生、隣にはいつもサッカーボールが側にいた気がする。
一緒にご飯を食べたり、お風呂に入ったり。寝る時も学校に行く時も。体から離れる時間より、体とくっついていた時間の方が短いんじゃないだろうか。

『お～い京介ぇ～。捕まえてごらんよ～』

『待ってよサッカーボールぅ～』

『『あはははは～』』

海岸線を走る俺とサッカーボール。

いつしか二人の間には恋の芽が、地面から少しだけ顔を覗かせていた。

「萌えぇー！！！　サッカーボール萌えぇー！！！」

「京介ぇぇぇー！！！　そっちにいっちゃ駄目だぁぁぁー！！！」

友樹は目が虚ろな京介の両肩を持ち、思いきり揺すった。

「はっ！？　友樹……、今俺は何を……？」

「頼むから僕を変質者の友人というポジションにしないでっ」

「そうか、すまなかった」

京介は特に気にしなかった。

「とにかく、京介はいつも損な役回りなのは確かだよね」

「あぁ。まぁそれも縁の下の力持ちみたいでいいのかもしれないけど……」

「運動会の百メートル走だって、いきなり予選でジャニーズとの対戦だったもんね」

「ああ。走る前に友樹が教えてくれなきゃ勝ってたところだったし……」

あれ、わざと負けるってのも難しいんだよな……。

「水泳の時だってジャニーズと」

足つった振りをするのって難しいんだよな……。

「揚げ句の果てにサッカーのポジションはボランチ」

ボール触る回数は多いんだけど、フォワード程目立たないんだよな……。

「ディフェンダーが三人しかいないから、滅多に攻めに参加できないし……」

「京介は体力が無いから、でしょ？」

「うるせぇっ」

「アハハッ。図星だね～」

こうやって友樹はいつだってニコニコ笑ってさ、俺が愚痴るとちゃんと対応してくれて。

こんなに童顔なくせに、中身は俺より大人なんだからな。

俺はいつしか、そんな友樹に惹かれていった。

『結婚しよう、友樹』

『え！？　だって僕たちは男同士だよ！？』

『愛に性別は関係ない。問題はそこに愛があるか否かだ』

『……僕を幸せにしてくれる？』

『あぁ。お前を世界一幸せなお嫁さん……、じゃなくてお婿さん……お嫁さん……お婿さん』

……。

「友樹萌えぇぇぇー！！！！　俺はお前を世界一幸せな、お婿さんにしてやるぜぇぇぇー！！！！」

「き、京介は一体どんな妄想してるんだろう……」

友樹は京介とつかず離れずの距離をとった。
はたから見たら、変質者にしか見えない彼。しかし、友樹はこんな京介が好きだった。

もちろん恋愛対象としてじゃなく、友人として。

二人は小学生の時から揃ってダブルボランチ（守備的ミッドフィルダー）として活躍してきた。その二人の実力は折り紙付きで、高校一年生の時から二人でボランチのレギュラーとして活躍している程だ。
技術、体力はもちろんのこと、二人が特に優れていたのは連携性。この連携性は、同じくボランチのスタメン争いをする人とって、決

して越えることの出来ない壁であった。

そう。

二人は愛し合っていたのだ。

「京介ぇぇぇー！！！　僕のお嫁さんになって下さぁぁぁい！！！！」

「友樹ー！！！　お前はそっちにいっちゃ駄目な人間なんだ！！！！
分かるかぁぁぁー！！！！」

バーサーカー状態から戻った俺は全力で友樹を揺すった。

「……はっ！　僕は今まで一体……？」

友樹と俺は同じボランチだけど役割が結構違ったりする。
友樹はパスが正確で視野も広いため、前線でプレーをする事もしばしば。対する俺は、その守備力を買われている為、監督からはあまり上がらないように指示を受けている。

「あれ？　黒胡麻饅頭？」

ボランチをやるって事はドリブルが苦手か。と言われると、実際はそうでもない。

自分で言うのもなんだが、俺は決してドリブルやパスが下手とじゃないし、寧ろかなり上手い方だと自負している。少なくとも楓先輩よりは上手い自信がある。
そしてさらに友樹は、俺よりドリブル、パスが上手い。それはもう、楓先輩なんて目じゃないくらい。

「ったく、どうやったらそんなにドリブルが上手くなるのかね。お前は」

「ふふっ。僕から言わせてもらうと、どうやったらそんなに一対一の守備が強くなるのか聞きたいよ」

「まぁ、そりゃあ……、小さい頃から友樹と一対一ばかりやってたんだから、上手くなって当然だろ」

「僕もそうだよ。ただ正直言うと、一対一でディフェンスばかりする京介の気が知れなかったけどね」

「お前、分かってねーな。意気揚々とドリブルしてきた敵を止めるというこの快感。たまらないんだぞ？」

「僕は、サッカーはドリブルで敵を交わしてなんぼだと思うんだけどね」

「ふんっ。友樹とは一生分かり会えそうにないな」

そうして二人で笑い合う俺と友樹。

あぁ。俺の高校生活はとても充実しているんだなぁ。と感じる事のできる今。

俺はこの時間、この空間を大切にしたいと、切に願う。
しかしそんな日常を壊すなんてとても簡単な事で。
俺にはどうする事もできなくて。
「友樹……、何だあの黒い……、ブラックホールみたいな……」
河川敷を歩く俺と友樹の前に何か黒くて丸い物体が浮いていた。
それは調度俺と友樹の目の高さと同じ位置に浮かんでいた。
大きさは……そう、バスケットボールくらいの大きさで……。これでもかというくらい黒かった。
「冷静に考えなよ。あれは大きな黒胡麻饅頭だよ。そんな事より今日の夕飯は……」
お前が冷静になれよー！？
しかも夕飯の話にすり替えようとすんなよー！？
「あ、だからさっき友樹は黒胡麻饅頭とか言ってたのか」
「うん、京介の会話に畳み掛けられちゃったけど」
と、その黒くて丸いブラックホー―
「―黒胡麻饅頭ね」

と、その黒くて丸い黒胡麻饅頭は少しづつ形を肥大させていく。
風船が膨らんでいくときのように、少しづつ、しかしながら確実にそれ……黒胡麻饅頭は形を肥大させていって。

そしてついには電話ボックスくらいの大きさにまで膨らんでしまった。

この光景には、さすがの俺達……というか友樹も戸惑った。

「こ、この黒胡麻饅頭……。へ、変形したね……」

「いい加減黒胡麻饅頭から離れろよ……。黒胡麻饅頭が浮かぶ訳無いだろ……」

しかし肥大化してからというものの、その黒くて丸い”何か”は全く動かなかった。
しかもそれをよく見てみると、それは球の形をしていないようだった。

「京介、近付いてみようよ」

「あ、あぁ……」

俺達は五メートルあった”それ”との距離を、四メートル。三メートル。二メートル、と近付けていった。

「よく見ると、黒胡麻饅頭じゃないみたいだね」
「今気付いたんだな」

そして俺達は残り一メートルという所に差し掛かった。
手を伸ばせば”それ”に届く距離。

「これ、ブラックホール？」
「言ったから！　それ俺が最初に言ったから！」
「あれ、そうだったっけ？」
「お前は本当に人の話を――」

――ピューロランドー。

その時だった。よく分からない効果音と共に風速六十メートルはあろうかという強風が”それ”から吹き出してきた。

「ぬぉー！　何だこの風はー！」
「風速六十メートルはあるよねー！」

「んなもん知るかよボケナスー！」

「キャー」

と、その突風から女性の声が聞こえた。

「おい友樹！　今、女性の声がしなかったかー！？」

「パンチラだねー！？」

ちげーよタコ！！！

「うわー！」

また女性の声。

「この黒胡麻饅頭から聞こえてくるねー！！！！」

もう黒胡麻饅頭でいいです……。

しかし確かに友樹の言う通り、声はこのブラッ……黒胡麻饅頭から聞こえてきた。

――と思ったのもつかの間。

「うわぁぁぁー！！！」

この強風に吹き飛ばされた何かが、俺の顔面に見事ぶつかった。

「いっけー石崎！！！　顔面ブロックだー！！！」

隣から何か聞こえた気がしたが、今はそれどころじゃなかった。
俺の体は頭に引っ張られるかのようにして吹き飛ぶ。それは首の長さが変わってしまうのではないか、という程に。

ドッスーン。

尻、頭、背中の順に地面にたたき付けられた。そして同時に襲い掛かる激痛。

「ナイスだ石崎！！！」

その激痛は、友樹の意味不明な発言に構っていられなくなる程の痛さだった。
おまけに俺の顔面にぶつかってきた”何か”は俺の顔面の上に乗り続けている。

痛い重い痛い重い痛い重い痛い痛い重い重い重い軟らかい……。

「軟らかい……？」

俺の顔面に乗っかっている”何か”は、とても重くて軟らかい。

「あれ……？　ここはどこ？」

喋った！？

「ここは河川敷だよ」

友樹！？　お前は誰と喋ってるんだ！？

「カセンジキ？　ここは虎牢関じゃないのか？」

「虎牢関？　虎牢関があるのは中国だよ。ここは日本だから、行きたいなら成田空港に行くしかないね」

「ニホン？　ここはカセンジキじゃないのか？　なんか頭が混乱してきたぞ」

あぁ、やっと分かった。俺の上に乗っかっているのは人間だ。
声の質からして、どうやら女性のようだ。さっき聞こえた女性の悲鳴は、彼女の物だったみたいだ。

……なんて冷静に考えている場合じゃ無いっつーの！

「ええぃ！　さっさとどけぇー！！！」

俺は寝返りをうって、顔面からその人を退かす。
そして勢いよく、ガバッと立ち上がった。

そして俺は自分に乗っかっていた人物を睨みつけた……が……。

「お前は……コ……コスプレ？」

その女はよく分からないが、鎧を身につけていた。
しかもそれなりに本格的な鎧を。

「違う。コスプレなんて変な名前じゃないぞ。わたしは張飛だ」

その少女は張飛と名乗った。

プロローグ3：友樹と京介の戦い

「ち、張飛？　なんか……変わった名前してるね」

張飛と名乗った少女に友樹が言う。

しかし張飛っていう名前からすると、彼女は……中国人……なのだろうか。

さっきも、虎牢関がどうこう言ってたし……。それにしては日本語が上手いな。

それ以前に、中国人ってこんな顔をしてるのか？　日本人となんら区別がつかないぞ。

「うーん、とにかくここは虎牢関じゃないのか。なんだかよく分からなくなってきたぞ」

「なぁ。さっきから虎牢関虎牢関言ってるけど、頭大丈夫？　……じゃなくて、えーっと、俺が言いたいのはその……夢遊病とかが大丈夫か……って事で」

「夢遊病って何だ？」

「夢遊病ってのは、レベルの高い寝返りの事だよ」

友樹、それはちょっと違うんじゃないか？

「寝返り？　だったら張飛は、寝相が悪い。ってよく関羽に怒られてるぞ」

か、関羽？　これまた中国人か？

「ああ、関羽は張飛の姉ちゃんだぞ。本当は違うんだけど、義兄弟の契りを交わしたから姉妹になったんだぞ」

「関羽と張飛……？　義兄弟……？」

すると友樹が彼女の言葉を、呪文を唱えるかのように繰り返し呟く。

そして呟きを終えると、一つ彼女に質問を投げ掛けた。

「もしかして、長男は劉備玄徳？」

「おぉー、お前よく知ってるなー。そうだぞ、兄者の名前は劉備玄徳だぞ。少し頼りないけど、国を想う気持ちは誰よりもあるんだぞ」

それを聞いた友樹は顔色を変えた。

俺は……いや、俺からするとさっぱり分からないのだが……。

「やっぱり……。いやっ、でも……有り得ないよ……」

「おい、友樹。俺に分かるように説明してくれ」

「えー！？　嫌だよー」

「お願いしますっ！！！　友樹が説明してくれないと話が進まないんですっ！！！」

俺は全力で土下座をした。頭を何回も何回も地面にたたき付ける。友樹はその光景を十分に堪能してから、分かったよ。と言う。こういう意地の悪い所はおじさんそっくりだ。

立ったままは疲れるので、俺達は道路から川にかけて続く坂に座り、話を始めた。

「三国志って知ってる？」

「いや、知らん」

「そこから説明が必要みたいだね……」

三国志。それは遥か昔の中国の話。広大な中国大陸が魏、呉、蜀という三つの国に別れ、互いに争った時代の話だ。

魏の皇帝は曹操孟徳、同じく呉は孫権仲謀、そして蜀の皇帝が、その劉備玄徳だ。

「その劉備玄徳には義兄弟がいたんだ。それが関羽雲長と張飛翼徳ってわけ」

「張飛翼徳って……。こいつが？」

「こいつじゃ無いぞ。張飛の名前は張飛翼徳というんだぞ。ちゃんと名前で呼ぶのが礼儀だぞ」

友樹はクスッと笑って話を続けた。

「で。虎牢関と言ったら、かの有名な虎牢関の戦いの場所でもあるんだ」

皇帝を蔑ろ（ないがし）にし、天下を自分の思うままに動かそうとする董卓将軍に反旗を翻した曹操が、諸国の英雄を集め董卓軍と戦った虎牢関の戦い。

簡潔な説明を終えると、友樹は張飛を見た。

「そうだぞ。張飛達は公孫讃軍として戦ったんだぞ」

「ちょっと待て。おかしいだろ」

俺にはどうしても腑に落ちない事があった。

それは当たり前の事で、それでいて一番重要な事だった。

「何でその時代の人間がここにいるんだよ」

「うん、どうしてだろうね。そもそも張飛は男だった筈だけど……」

俺と友樹はほぼ同時に張飛を見た。

「張飛は女だぞ。男じゃないぞ」

「ああ、まぁそりゃ……見れば分かる」

鎧を付けていても目立ってしまうほど大きな胸が、何よりも証拠になった。

「胸ばっかり見てると変態扱いされるよ京介？」

「んっ！？　いやっ、そのっ……」

「あははは～。京介は女性に慣れてないから仕方ないよね～」

お前だって慣れてないだろ。と言おうとしたが、それは喉から出かかった所で止まった。

「張飛はあの石炭から出てきたんだけど、その原因の心あたりはある？」

サッカーと同じで、友樹は切り替えがとても早い。言い返そうと思っても、すぐに別の話題にしてしまう事が多々ある。
俺はどうせそうなるか、もしくは言っても軽く流されると思ったから、口にしなかったのかもしれない。

とにかく、友樹が指差した方向にはあの石炭……あの黒い”何か”は無く、張飛を退かした時には既に消えて無くなっていた。
つまり、張飛とそれは何かしらの関係があるのだろう。友樹はそう考えているに違いない。

「うむ、黒胡麻饅頭なら心あたりがあるぞ」

あれれ？　おかしいのは俺の頭なのかなぁ？
だって、黒胡麻饅頭って……。
えぇ～、黒胡麻饅頭なのか～？

「心あたりって何かな？」

「うむ。張飛達は呂布と戦ったんだ。その時だ……」

＊

「呂布はどこだー！　出てこーい！」

呂布は弓馬を取っては天下無双の豪傑と言われていたんだぞ。そんな豪傑がいると聞いちゃ、張飛は黙ってはいられなかったんだ。だから何度も呂布を呼んだんだな。

張飛が呂布を呼んで数分も経たないくらいだったな、全身が真っ赤な馬に乗った将を見つけたのは。

「私が呂布です」

そいつは真っ赤な馬に跨がったままそう名乗ったんだ。

「お前が呂布奉先か！　我が名は張飛翼徳！　いざ尋常に勝負！」

「ふんっ、たかが兵卒のくせに生意気なやつですね。さっさと倒してやるです」

しかし張飛も強いからな、さっさと倒されはしなかったんだ。一騎打ちを続けて十分くらい経った時だ、さすがに張飛も疲れてきたんだ。でも呂布は息一つ乱してなかったんだな。

「おめぇ本当に兵卒ですか？　私とここまでやり合えたのはお前だけです」

「あったりまえだ！　張飛は強いんだぞ！」

「確かに強いのは認めざるを得ないようですね。でも、そろそろ疲れが見えてきてるみたいですよ」

さすがに呂布は張飛が疲れていた事に気付いていたんだな。
でも張飛は負ける気がしなかったんだ。

「張飛！　助太刀するぞ！」

「大丈夫か張飛！？」

そうだ。姉ちゃんと兄者が助太刀にきてくれたんだ。
しかも助太刀にきてくれたのは兄者達だけじゃなかったんだぞ。

「呂布！　私が相手よ！」

「我が刀の錆にしてくれる！」

「ここで会ったが百年目！　勝負ですわ！　呂布！」

曹操、趙雲、袁紹が助太刀にきてくれたんだ。
よし、これで勝てると思ったのもつかの間。対する呂布にも助太刀が来たんだぞ。

「愛しのマイハニー！　僕が助けてあげるよー！」
「張遼！　てめーはくんなです！　キモい病が感染するです！」
「フハハハハ！　こんな奴らは私に全て任せろー！」
「司馬懿！　てめーもキモい病が感染するからくんなです！」
その時だ。なんか張飛と呂布の間に黒胡麻饅頭が浮かび上がったんだ。

＊

「張飛達みーんな、それに吸い込まれたんだぞ」
今の話を聞く限り、変人の集い所のようにしか思えないし、そもそも……。
「そんなの嘘だろ？」
「嘘じゃない！　張飛は嘘をつくのが一番嫌いなんだ！」

「だって、非現実的すぎやしないか？　さすがに」

「張飛は嘘をついてないって言ってるぞ！」

「うん。それに、こんな嘘ついても仕方ないしね。だから僕は信じるよ」

うーん……。確かに、こんな嘘ついても仕方ないよなぁ……。
それに張飛の目を見ても……。

「むぅぅ～」

こんなに純粋そうな女の子が嘘をつくってのも考えづらいしなぁ……。

「まぁ、仮にその話が本当だとしてさ。他の人達はどこに行ったんだ？」

「うむ、それは分からないぞ。そもそもここがどこかも分からないんだぞ」

「うん、だったら京介の家に泊まっていく？」

もう、ね。俺の家はお前の家。お前の家はお前の家だからね。

「うむ。ここがどこか分からないから、それは助かるぞ」

「よし、決まり。京介もそれでいいよね？」

「はい、喜んで」

どうせ何を言っても結局は俺が負けるんだ。だったら少しでも前向きに前向きに。

人はこうやって大人への階段を、一段づつ一段づつ登っていくのだろうか。

俺は今、少しでも笑っていますか？

俺は今、幸せですか？

「泣いてるよ」

俺には涙を拭う気力すら無かった。

「ほら、ここが僕の別荘……じゃなくて京介の家だよ」

これが友樹の本心ですよ。分かりますか？

「なんだか張飛がいた所とはまるで別世界だぞ！？」

張飛はキョロキョロと周囲を見回しながらはしゃいでいた。

「じゃあ、散らかっているけど」

「それ俺の台詞だから」

友樹はとても失礼な一言と共に、家の扉を開けた。

いつもと変わらない玄関。

そこにあるのは靴はお袋の履く一足だけ……。

二足ある……。

「おかえり、京介」

リビングの扉から出てきたお袋。

「お邪魔しています」

隣には客人と思わしき、知らない女性。

その女性は鎧を身につけていた。

「あ！　姉ちゃん！」

「えっ！？　張飛！？　張飛なの！？」

……。

「ねっ？」

「何が、ねっ？　なんだよお前はー！！！」

こうして俺の充実した学園生活は幕を閉じた。

そしてその代わりに奇想天外な学園生活が脈動を始めた。

プロローグ３：友樹と京介の戦い（後書き）

次回から本編開始です。

第一戦：藤澤家の戦い

彼の名前は藤澤京介（ふじさわきょうすけ）。この近くにある県立高校に通う高校一年生……。ん？　四月から二年生なんだっけ？　新学期から二年生になるんだっけ？

まぁ、そんな事はどうでもいい。とにかく京介は今月から高校二年生としてスタートする。

そんな彼の趣味はサッカー。サッカーは小学生一年生の時から初めていて、今年でサッカー歴十年。そして四月十日から十一年目が始まるのだ。

しかも年数が語る以上に、京介は人生の時間を殆どサッカーに費やしてきた。その甲斐あってか、中学生二年生の時は全国大会にも出場した。

しかしそれでも優勝までは行けず、ベストエイト止まり。おまけにその次の年は県の予選で負けてしまった。

「おーい京介ー。母上が朝ご飯だって言ってるぞー」

「全国優勝がしたい。将来プロになろうがならなかろうが。そんな事はどうでもよくて、俺はただ全国優勝したいんだ」

「おーい京介ー。聞こえてるのかー」

「それは友樹と交わした誓いでもあって、俺達はその為に色々と努力をー―」

「――朝ごはーーーん！！！！！！」

「ぬわぁぁぁぁー！！！」

張飛が京介の耳元で思い切り叫んだ。
こ、鼓膜が……破れる……。と、京介はキンキンと鳴る耳をふさぎながら涙目になる。

「やっと気付いたか。朝ごはんだぞ、京介」

「ん……。あぁ……張飛か……。おはよう」

「うむ。おはようだぞ、京介」

肩の所で切り揃えられた短い黒髪。二重でぱっちりとした大きな目。その中心からすらりと伸びる鼻の筋。少し褐色した肌は、彼女の活発な性格を表すかのようだ。
そんな顔立ちも喋り方も太陽のように明るい彼女の名前は張飛翼徳。なんでも彼女は、三国志に出てくる英雄らしい。
何故そんな昔の英雄がこんな場所にいるかという説明は、割愛させていただく。

「ほらっ。ぼけっとしてないで、さっさと行くぞ」

張飛はそう言うと、京介の背中に周りこんで、両手でそれを押してきた。

「分かった分かった。だから押すな押すな」

「うむ。京介が分かったなら、もう押さないぞ」

彼女はとても純粋で、故に京介は先程の事を怒れずにいる。
はぁ……。純粋って罪だよな。とぼやきながら京介は張飛と階段

を下りる。

「張飛、昨日はよく寝れたのか？」

「うむ。あの布団というやつはとても寝心地がよかったぞ」

「そっか。よかったな」

「うむ。それに、昨日はとても美味しいご馳走を頂いたからな。朝までぐっすりだったぞ」

京介はそれを自分が作った訳じゃないのだが、何故か嬉し恥ずかしくなってきた。

そして同時に、昨日のは夢じゃなかったんだよな……。と、京介は昨日の出来事を振り返った。

＊

「初めまして。私の名前は関羽雲長といいます。そしてご存知の通り、この娘が張飛翼徳です」

「うむ。張飛翼徳だぞ」

京介達は話を纏める為に、とりあえずリビングで話し合いの席を設ける事にした。

四人用の洋テーブルに腰をかける関羽。その隣に張飛。関羽の正面には京介の母親、そしてその隣が友樹だ。

「おかしくね？　何で友樹が座ってんの？　何で俺が立ってんの？
おかしくね？」

「男が細かい事を気にするんじゃありません」

「えー、だってー」

「そうそう。そんなんだから彼女ができないんだよ。京介は」

「テメーは黙っとけやァ！！！」

あー腹立つなーもう！　と、京介は友樹をギラギラとした視線で睨み付ける。

「京介殿。私が立つのでどうぞ、お座り下さい」

と、関羽は立ち上がって椅子を引き、そこに案内するかのように手をかざした。

「京介、こんな可愛い女の子に気を使わせるんじゃありませんよ。いいのよ関羽ちゃん、京介はいわゆる立ちたい症候群ってやつだから」

「立ちたい症候群？」

「そう。立ってないと死んじゃう病気なのよ」

「えっ！？　それは本当ですか！？」と関羽は目を大きく見開き驚いた。そしてすかさず京介に向かって頭を下げた。

「そうとは知らず失礼をっ！　お許し下さいっ！」

頼むから謝るなよ……。と心の中で思いながらも京介は、いや、気にしないで。と関羽に言った。

そんな病気じゃない。とはとてもじゃないが言えない京介であった。

「さてと。とりあえず話を纏めようか」と、友樹がその場をまとめる。

「二人から聞いた話を纏めると、つまり……」

関羽は、呂布と張飛の所に着いた瞬間何かに吸い込まれ、気付いたら京介の家の前に居た、と。

張飛も同じく何かに吸い込まれ、気付いたら京介の上に乗っていた。

武器や馬もどこにいったか分からないし、他の人がどこにいるかも分からない。

「この近辺にいるかどうかも確定じゃないし、そもそも場所だけじゃなく、時間さえもバラバラかもしれない。という事だね」

「うむ～。張飛は、せめて兄者は無事であって欲しいと思うぞ」

「そうですね。私も何より兄上の無事を確認したいです」

張飛と関羽は少し心配そうな顔を浮かべながら言った。

「ウフッ。二人共兄想いなのね♪」

「お袋、三十路にもなってウフッってのは――」

「――黙ってろやァァァ！！！」

「ンヌブフゥゥゥー！！！」

禁句その一。

三

十

路

「母上殿は三十を越えていたのですか！？」

「ええ。それが何か？」

京介の母親の眉間に血管が浮かび上がっているのが見える。

それに関羽は気圧されるも、少しずつ口を開いて。

「いえ、とてもそうは見えなかったので……」

「あらまぁー。嬉しい事言ってくれるのねー」

友樹が俺に耳打ちする。

「相変わらずなんだね、おばさんは」

「ああ。お前も十分に気をつけろよ」

うん、分かった。と友樹は言い、京介の耳から遠ざかった。

「という事は、関羽ちゃんも張飛ちゃんも寝る場所が無いのよね？」

その質問に、二人は頷いた。

「うん、決めた。関羽ちゃん、張飛ちゃん。だったらこれからずーっと家に居てもいいわよ♪　いいわよね、京介？」

「えっ？　何がっ？」

「だーかーらー、この二人は今日から私の娘になるって言ってるのよー」

チッ、この三十路め。相変わらず頭のネジが数本外れてやがんな。と、京介は心の中で吐き捨てる。

「いいわよね？」

「はい、喜んで」

しかしこの世は弱肉強食だった。

＊

「しかし、本当に住んでもいいのか？　迷惑じゃないのか？」

「いや、迷惑なんかじゃないよ。寧ろ、兄弟ができたみたいで嬉しいから」

とは言いつつも、同い年の少女と一つ屋根の下で暮らす。という現実に、多少不安は感じている京介だった。

「そうか。張飛もとても嬉しいぞ。母上は優しいし、ご飯は美味しいし……あっ、もちろん京介も優しいから好きだぞ」

なんていい女の子なんだ……。と、京介は目をうるうるさせながら感激していた。

そしてバターの香りが漂うリビングへと足を運んだ。

「あら、おはよう京介。張飛ちゃん、ありがとうね♪」

「うむ。これくらいなら簡単だから、これからもどんどん頼んで欲しいんだぞ」

「あらまー♪　張飛ちゃんは可愛いわねー♪」

そう言って京介の母親、藤澤由美(ふじさわゆみ)は張飛を抱きしめた。

「おはようございます、京介殿」

「ん？　あぁ、おはよう、関羽」

その光景を眺めていた京介に、横から朝の挨拶をする関羽。

「あの、その、なんだ……」

「何でしょうか？」

張飛とは違ってとても長い黒髪を持ち、それを後ろに簪(かんざし)で止めている。

張飛程は大きくないが、やはり大きくクリクリとした目、顔の中心にスッと伸びる鼻。白くてつやつやの肌に、口紅を付けていないのに綺麗な色をする唇。その口は少し小さめだ。

美少女。その一言に尽きる彼女に見つめられた京介はみるみるうちに顔が赤くなる。

「その、なんだ……。殿とか付けられるのは何か変だし……、俺達同い年なんだから呼び捨てでいいぞ」

「は、はい。京介殿が……じゃなくて、京介さんがそうおっしゃるなら」

さん付けも十分呼び捨てでは無かったが、まぁいいや。と京介はそれ以上何も言わなかった。

「そうそう京介、今日の朝食は関羽ちゃんが手伝ってくれたのよ？」
「へぇー、道理でいつもより豪華っ……！」
ミス。なんと京介の口は滑ってしまった。
「ギャァァァーー！！！！！！！」
バサバサバサッ。
近くの木に止まっていた鳥は、安息の木を求めて旅立った。
＊
「京介、新学期はいつからだっけ？」
京介と由美。張飛と関羽で向かい合って食べる朝食は、いつもより賑やかだった。
滅多に家に父親が帰ってこない為、京介達の食卓には、ほぼ毎日二人しか居なかったからだ。
とは言っても、京介と由美の間に会話が無かったという訳でも無いのだが。
その賑やかな朝食が終わると、張飛と関羽は二人で皿洗いをする

と言って、皿洗いを始めた。
京介と由美はその恩恵に預かり、二人でソファーに座って、ゆっくりとくつろいでいた。
「えーっと、五日後とかだったと思う」
「そう。それじゃあまだ間に合うわね」
え、何に？
京介に悪寒が走った。
「決まってるじゃない。新学期に、よ」
チッ、この三十路は相変わらず電波脳してやがんな。と、京介は心の中で吐き捨てる。
「今から二人の制服のサイズを計ってきてくれるかしら？」
「おう。任せてくれ」
殴られて了承するか、殴られないまま了承するか。
そんなのは最初から答えは決まっているようなものだ。
＊
「……と、いうわけで。ついでに二人の服も買ってこいってさ」
それを言われた京介は、今着てる由美の服をあげればいいじゃな

いか。と一瞬思ったが、その考えは振り払った。
京介達は滅多に家に帰らない父親のお陰でお金に困った生活をしている訳でも無いし。

「学校って、塾のような場所なのか？」

「あぁ。張飛の言う”塾”ってのはよく分からないけどな。多分そんな感じだ」

まず三人は制服のサイズを計りに、駅前にあるデパートに向かった。京介の家から十分程度歩いた所にそこはある。
京介達が暮らす町はとても賑やかで、今彼らが歩く駅前大通りは春休みという事もあって、平日にも関わらずとても賑わっている。
さらにこれが休日ともなると親子からカップルまで、様々な人々でひしめき合う空間になる。
欲しい物はあらかたここで揃うので、京介達が買い物の為に電車を利用する機会は滅多に無い。

「しかし、日本という場所は凄いのですね。私が暮らしていた場所とはまるで違います」

周りをキョロキョロ見回しながら関羽が言う。

「そりゃあ、二人が暮らしていたのって西暦二百年くらいなんだろ？　もう今は西暦二千年を過ぎてる訳だし……」

「うむ。一年は物凄く長いからな。千八百年っていったら、想像もつかないくらい長いんだろうな」

京介を中心に、右に関羽。左に張飛。京介は、端から見たら、美

少女二人を連れて歩くプレイボーイ状態だ。
周りの京介に対する視線は、それはそれは鋭かった。しかし当の本人は特に気にしていない……と言うより、京介はただの鈍感なので、この場合は気付いていない、が正しいと思われる。

「ここ、ここ。ここで計ってもらうんだ」

京介はデパートの七階にある洋服屋の前で止まり、そこを指差し言った。
そこでは新入生と、その親とで賑わっていて、店内は大忙しだった。

「私達くらいの年の人が沢山いますね」

と、関羽。

「張飛より強い奴はいるのか？」

何の種目で？　と京介は思う。

「いらっしゃいませ」

と、その光景をぼーっと眺めていた三人に店員が話掛ける。
そこからは、最悪でも”ハイ”と”イイエ”だけが言えればサイズが計れるので、張飛や関羽でも簡単にサイズを計測する事ができた。

第一戦：藤澤家の戦い（後書き）

長くなりすぎてもアレなんで、微妙な場所ですが、切りました

第二戦：ファーストフードの戦い

漢の都、洛陽。

街は栄華を極め、人で溢れ、城内のあちらこちらで活気に満ち溢れる声が聞こえてくる。

しかし、ある男が宮廷の混乱に乗じ、洛陽を一瞬にして暗黒の世界に変えてしまった。帝をないがしろにし、兵士は略奪を繰り返し、揚句の果てには帝の弟、先代の帝の母親まで殺してしまう始末。

彼は今、天下を我が物にし、酒池肉林の野望を果たさんとしているのだ。

「董卓将軍、全て作戦通りに終わりました」

謁見の場の椅子に座るのは、かつて西涼の一将軍だった、董卓という男。

赤光りした鋭い眼光と、氷のように冷たい表情。そして彼の振る舞いから、世の人々は彼の事を魔王と呼んでいた。

「そうか……。ご苦労だった」

「はっ。では引き続き研究を致したいと思います」

「ああ、それでは私は寝る。何かあったら起こせ」

董卓はそれだけを言うと、椅子から立ち上がり、奥に消えていった。

李儒はその姿が見えなくなるのを確認してから、その場をゆっくりと後にした。

＊

彼女が目を開けると、そこは違う世界が広がっていた。

周りの人達は鎧すら身につけていないどころか、見たことも無い服を着ている。

これは夢か。とキョロキョロ辺りを見回すも、見たことも聞いた事も無い世界に、彼女の頭はますます混乱する。

『黒いブラックホールのような物から、強い風と共に現れた少女』と、彼女は周りの視線を一様に集める。しかし、当の彼女はそれどころでは無い。

キリッと左右に鋭く伸びる大きな目。彼女のその表情から、怜悧（れいり）な、という印象を受ける。

「あら、あなた。もしかして……」

――不覚。

この環境に戸惑っていたとは言え、知らぬ間に背後を取られていたなど、不覚以外の何物でも無い。

彼女は聞こえてきた声には構わず、腰に付けていた剣を右手で抜くと、素早く振り向き構えた。

「関羽ちゃんと張飛ちゃんの知り合いかしら？」
彼女が振り向いた先にいたのは、見た目はまだ２０代後半くらいの女性だった。

＊

「うむ。これがその、バンバーカーというやつか」
「ハンバーガーな。中に挟まってるのが牛の肉」
と、張飛にツッコミを入れながらハンバーガーの説明をする京介。
「いい匂いですね」

鼻をくんくんさせながら関羽が言う。
京介が、昼ご飯はどんな物が食べたいか。と聞いた所、張飛が、にくー。と言った為、京介はムックとドナルドというハンバーガー専門のファーストフード店に二人を案内した。
三人は四人用の対面席に、京介と関羽、張飛が向かい合って座った。張飛が通路側、関羽が窓側だ。
「しかし酒が飲めないとは思わなかったぞ。法律ってやつは面倒なんだな」
「張飛、軍律と同じですよ。守らなくては駄目です」

そう。張飛は何を思ったか、店員に酒を注文したのだ。
ファーストフード店に酒がある訳じゃ無し、そもそも張飛は未成年。
もちろんその店員はあっけらかんとした。
「あと四年も我慢しなきゃいけないのかー」
「えぇ。軍律なら仕方ないと諦めるのが一番です」
「くそー、こうなったらガンバープーのやけ食いだぞー」
「ハンバーガーな、ハンバーガー」
正解から遠ざかる張飛に、京介は二回言った。
「うぉー！　すっごい美味しいぞー！　姉ちゃんも食べるんだぞ、このノンシュガー」
「ハンバーガーな」
「はいはい、分かったから静かにしてなさい」
大はしゃぎする張飛を関羽が宥める。
何回、ハンバーガーだ。と言っても理解してくれない張飛。もしや張飛は自分の話など聞いていないのでは？　と、不安に駆られた京介は、一つ質問を投げ掛けた。
「張飛、今日の夕飯は何がいい？」
「うむ。今日も母上の作るカルカッタが食べたいぞ」

「カルボナーラな」

一応聞いてくれてはいたが、どこかやる瀬ない京介だった。

「あっほんとだ。美味しいですね、このバンクーバー」

「だからハンバーガーだって言ってるでしょ」

あなたにボケられるのが一番キツイ、と京介。

「ごめんなさい。面白そうだったので、つい……」

か、可愛い……。

少しはにかみながら言う関羽に、京介の鼻の下は伸びずにはいられなかった。

「それにしても……。この服は変わっていますね……」

そういう関羽が着るのは、こんな物しか無くてごめんねー。と由美が渡した、括れた形をする白い長袖のシャツと、ベルボトムのジーパン。由美が近くのコンビニに行く時によく着る組み合わせだ。

しかしこんなラフな格好でも絵になるんだからなぁ……。と京介は感心する。

「それにこの、ブラウニーとかいうやつはなんか窮屈だぞ」

「ブラジャーな」

そう言う張飛は、桃色のタンクトップに、もう少しで下着が見え

るんじゃないか。というくらい短いローライズのジーンズを着ている。

胸が大きいなぁ……。と京介は感心する。

「京介達は、わざわざ息苦しくなってまでこんな物を付けてるのか？　よく分からないぞ」

言いながらブラジャーをモゾモゾと動かす張飛。京介は目のやり場に困った。

「俺は男だから付けないけど……。ていうか……、息苦しいのは多分……、サイズが合ってないからだと思う……」

そしたら服だけじゃなくて、下着も買いに行かなきゃいけないじゃないか！？　と京介は気付く。

「フフフフフ……」

と、京介の耳に響いてくる関羽の笑い声。

「私は買う必要無いみたいですね……。だって胸が小さいんですから……」

えっー！？　この人、何言ってるのー！？　と、京介は心の中でツッコむ。

確かに関羽の胸はあまり大きくなく、AかB……際どい所だ。

「そんなのはあまり気にしない方がいいんじゃ……、そもそも張飛が大きすぎるんだから……」

京介は関羽の胸元をチラチラ見ながら、あのー。と話し掛けた。
関羽の目にはうっすらと涙が浮かんでいる。

「う、うむ、そうだぞ姉上。胸の大きさが全てじゃ無いぞ」

「いいんですよ、そんな慰め……。どうせ私の胸じゃお婿さんすら貰えないのですから……」

こんな卑屈な人だったのか！？　京介は驚かずにはいれなかった。
まぁ……しっかり者とは言え、まだ十六歳なんだから、欠点の一つや二つくらいはあるか……。

「あの……な、関羽。昔は知らないけど、今は胸の大きさを気にする男性なんか、実際これっぽーっちしか居ないんだぞ？」

「そんな慰めは無用ですよ」

年頃の女性って気難しーのな！！！　京介は半ば自棄（やけ）になる。

「あのな、今の男は顔で女性を判断するんだよ。胸や性格はオマケなの！」

ちなみに京介は心底そう思っている訳じゃない。しかし、世間の一般論としてそう関羽に告げた。

「顔……、ですか？」

「ああ。世間一般論としてはな。だから胸なんて気にする必要は無いんだよ」

「しかし、顔と言われましても……」

そこまで俺に言わせるのか……。と京介は、関羽の何ともし難い性格に、少し呆れつつ。

「関羽だったら突っ立ってるだけで求婚されるっての。凄い……、その……びじっ……」

今まで威勢の良かった京介だが、美人だから。の一言がなかなか出てこない。

「びじ……何ですか？」

「いや……その……」

そういや、勢いとはいえ、こんなに女の子と喋った事無かったんだよな……。京介はその事を意識すればする程、美人だから。という一言から離れていく。

京介は今までサッカー一筋で生活してきた為、ボールの扱いは上手いのだが、女性の扱いに関してはてんで駄目。

話そうとしても、眼を合わせられない。顔が赤くなる。言いたい事が伝えられない。の三拍子が揃った、いわゆるシャイボーイなのだ。

『おいどうした京介！　たった一言だろ！　それをウジウジしやがって、お前は男か？　そんなんだからお前はいつまで経っても彼女が出来ないんだよ！』

と、京介の脳に響く声が京介に喝を入れる。

『これはお前が大人になる為に必要なステップなんじゃないのか？
お前に大人になって欲しい神様が与えた試練なんじゃないのか？
お前も男ならのり越えてみせろ！』

……お前は誰だ。何故こんな事を俺に言う！？　と、京介は心の中に問い掛ける。すると――。

『――この声はお前自身の中に眠るお前自身の声だ』

俺に眠る……、俺の声？

『ああ、そうだ。お前は自分自身に眠る自分自身の声が聞こえる、言わば選ばれし人間なのだ』

選ばれし……、人間？　俺が？

『ああ、そうだ』

マジでか！？　マジなのか！？　俺は選ばれし勇者なのか！？

「んな訳無いじゃない」

友樹でした。

「関羽さん、ごめんね。京介、女の子に慣れてないから照れてるんだ」

と、何事も無かったかのように友樹が言う。

「照れている……のですか？」

京介は小声で、おい馬鹿っ。と言うが、友樹はそれを無視して話を続ける。

「そっ。京介は美人だから。って言おうとしたんだと思うよ」

「び、美人！？　私がですか！？」

それを聞いた関羽は急にオタオタし始めた。

「うん。関羽さんは誰が見ても美人だと思うよ。ねっ、京介？」

「お、ぉ、ぉ、俺に振るな！！！」

「私がび、びびびび美人！？」

関羽は今まで武術一筋だった為、男性から美人と言われた事が無いどころか、女性として扱われる事すら初めてだった。

「あはは～、二人して照れてる～」

「姉上の照れた顔を見るのは初めてだぞ」

ハンバーガーに乗るケチャップみたいな顔をする二人を見ながら、友樹と張飛は大きな声で笑った。

＊

「はぁ……。ここは一体何処なのよ……」

太陽が世界を茜色に染め上げる夕刻。鎧を身に纏う少女は、一人住宅街を歩いていた。

周りをキョロキョロと見回しながら歩くこと、かれこれ四時間。普段は馬を使って移動している彼女は、歩くのに慣れていない。その為、四時間の徒歩に彼女の足は悲鳴をあげてしまう。

「水を貰おうかしら……」

彼女はそう呟き周囲見渡す。そして他の家より一回り大きなそれに向かった。大きい家ならば、泊めてもらえる可能性も大きいと思ったからだ。

彼女は門をくぐり、家の扉と思われる所へとずんずん歩いていく。すると――。

「あら、曹操はんやありまへんか」

この間延びした声。独特の喋り方。

この世界に来てから初めて名前で呼ばれた彼女は、聞き覚えのある声にすぐさま振り向いた。

「り、劉備！？　無事だったの！？」

「もちろんどす～」

と、曹操は劉備に駆け寄った。

「それにしても、ここは何処なんやろな～？」

それを知っていたら苦労はしない。
曹操はがっくりと肩を落としながら、ははは。と愛想笑いを浮かべる。

「でもよかったわ。私一人じゃ心細かったから」

「ウチも、曹操はんに合えてよかったわぁ～」

そこから二人はお互いの状況を話し合った。
曹操も劉備も、気付いたらこの世界に居た。それ以外に分かる事は無かった。
とりあえず、水を貰うついでにここが何処なのか聞こう。という結論に至る。

辺りを見渡すと、その家の周りには木々がおいおいと繁り、入口には大きい門がどんと構えてある。
そして一番不思議なのが、扉の前にあるこの鈴だ。これは呼び鈴なのだろうか。
曹操はその鈴から伸びる綱を手の平で包み、前後に動かした。

シャンシャン。

「……。何も反応が無いわね」

「そうやなぁ～」

鈴を鳴らしてから三分以上が経過したが、家の人が出て来る気配は一向に無い。

「留守なのかしら」

「そうやなぁ〜」

「誰かいませんかー」

と曹操が大声で呼ぶと。

「はいはい。何の御用かしら……。あら、珍しい恰好のお客さんね」

一人の巫女が現れた。

＊

一人はうきうき。一人はおどおど。そしてもう一人は憂鬱な顔をしていた。

「なんだかとっても可愛い服ばかりだったぞっ！」

うきうきな張飛がはしゃぎながら言う。まるで自分が違う世界に飛ばされた事などすっかり忘れてしまっているようだ。

「こっちは張飛がはしゃぐから、疲れたっつーの」

憂鬱な顔をした京介が言う。

「私が……可愛い……」

昼食の時以来、終始おどおどしていた関羽がぼそっと呟く。

そして既に暮れてしまった空を見上げる張飛。

「兄者は無事かな」

「ええ。明日にでも探しに行きましょうか」

二人だけに探させたりしたら、ミイラ取りがミイラになってしまう。京介は明日も休めそうに無かった。

「着いたぞ」

ふーい、今日は疲れたぞーい。と京介は心でぼやきながら、明かりが灯る家の扉をゆっくり開けた。

「動くな」

そう告げられた京介の目の前には、それはそれは立派な日本刀が。今まさに京介の首を掻き切ろうとしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6357e/

学園無双～天下無双はこの俺だ～

2010年10月8日13時58分発行